

フレッシュマンキャンプの評価と改善についての検討

深 見 匡・村松芳多子・竹 内 真 理・田 中 進

Study on the assessment and improvement of freshman camp

Tadasu FUKAMI・Kanakano MURAMATSU・Mari TAKEUCHI・Susumu TANAKA

高崎健康福祉大学紀要 第19号 別刷

2020 年 3 月

フレッシュマンキャンプの評価と改善についての検討

深 見 匡・村松芳多子・竹内真理・田中 進

高崎健康福祉大学 健康福祉学部 健康栄養学科

(受理日 2019年9月13日, 受稿日 2019年12月19日)

Study on the assessment and improvement of freshman camp

Tadasu FUKAMI・Kanakano MURAMATSU・Mari TAKEUCHI・Susumu TANAKA

Department of Health and Nutrition, Faculty of Health and Welfare,
Takasaki University of Health and Welfare

(Received Sep. 13, 2019, Accepted Dec. 19, 2019)

要 旨

本学健康栄養学科では新入生に対しフレッシュマンキャンプを開学以来毎年実施してきた。フレッシュマンキャンプ終了後にはアンケートを実施し、次年度の計画の参考にはしてきた。しかし、これを統計処理し定量的に分析すること等は行っておらず、アンケートを十分に活用してきたとは言えない。そこで今回、利用可能な5年分のアンケートを使用し、実態を定量的に把握、評価、分析することにした。アンケートの内容は2015年～2018年は9項目の質問と2項目の記述質問とし、2019年は4項目の質問を追加した。結果として、学生のフレッシュマンキャンプの数値的評価はおおむね高く、一定の評価はできる。学生の多くは「有意義だった」と評価していて、その根拠は「友人作りのきっかけ」になることが大きいようであった。一方、改善が望まれることとして行事の「飯盒炊爨」がある。荒天の場合は苦情が集中する。学生の健康に配慮し代替的行事への変更など臨機応変な対応が求められた。

I. はじめに

健康栄養学科では、開学以来毎年新入生に対しフレッシュマンキャンプを実施し、その主な目的を新入生の親睦を深めることと考えてきた。しかし、社会的に見ると、フレッシュマンキャン

プのような取り組みは大学教育の「初年次教育」(新入生対象の教育)の一つとして認識され、昨今の日本の大学教育の「質の維持・向上」をはかる方策として重視されている¹⁾。フレッシュマンキャンプを「初年次教育」として取り組む大学も多いとされ²⁾、本学科も、そうした社会

的動向をよく踏まえなければならないだろう。

本学科ではフレッシュマンキャンプ終了時にアンケートを実施し、結果について確認し、次年度のフレッシュマンキャンプの参考等にしてきた。しかしアンケート結果を統計処理し定量的に分析することなどは行っておらず、アンケート結果を十分に活用してこなかった。もともとフレッシュマンキャンプに対する教育的な認識が弱かったことが原因と言える。

そこで今回、現在利用可能な2015年～2019年までの5年間のアンケート結果を使用し、フレッシュマンキャンプの実態を定量的に把握・評価し、問題点がある場合はその原因を探ることにしたい。そして本学科の新入生の大学生活の開始の手助けとなるよう、またその後の大学での修学が円滑に進むようフレッシュマンキャンプの内容の改善を図りたい。さらに来年度に向け、新入生の入学時当初のコミュニティ作りに役立ち、また、健康栄養学科学生としての動機付けを高められるような企画作りとそれを可能にするアンケート作りに活かしていきたいと考える。

Ⅱ. フレッシュマンキャンプの概要

健康栄養学科のフレッシュマンキャンプ（以下キャンプと略記する）は2015年～2019年まで、移動時の利便性等の判断から同一の宿泊地、同一の宿泊施設で行っている。引率は、学生委員と教務委員及び担任で教員が約5名、世話係の学生が10名（学科の新2年生）で行っている。これまでのキャンプの主な内容は表1に示す通りである。

行事の内容は（1）学科ガイダンス①…学科の教育課程や履修方法等、教務関係の講義（学

表1 フレッシュマンキャンプ行程表

1 日 目	12:00	宿泊施設到着、昼食 学科ガイダンス① レクリエーション① 夕食 先輩と語ろう (グループワーク)
	13:00～14:45	
	15:00～17:00	
	18:00	
	19:30～21:00	
2 日 目	9:00～10:20	学科ガイダンス② レクリエーション② (飯盒炊爨) 終了
	11:00～14:00	

科ガイダンス①については後述するように2019年のみ午前中に大学で実施した）、（2）レクリエーション①…引率学生主催のゲーム等を中心としたレクリエーション、（3）「先輩と語ろう」…引率学生によるグループワーク形式の授業案内や学生生活相談、（4）学科ガイダンス②…学科の係決めやキャンプのまとめ等、（5）レクリエーション②…場所を移動し昼食の飯盒炊爨とレクリエーション、となっている。学科ガイダンスについては教員が責任を持つが、レクリエーションについては引率学生が企画と実行をほぼ行い、教員は助言を行う程度である。引率学生は前年の12月に1年生を対象に希望者を募り抽選で決定する。これまで引率学生は学科の事情もあり新2年生に限定してきた。キャンプの目的については、履修に関する知識を獲得することと新入生の親睦をはかることを主としていて、その後の学科の学修に直接関わるような内容の指導等は行っていない。

Ⅲ. 分析の方法

1. 対象者および調査期間

対象者は、2019年4月9～10日実施のキャンプに参加した健康栄養学科入学生90名、および2015～2018年4月実施のキャンプに参加

した学生 344 名 (2015 年 88 名, 2016 年 84 名, 2017 年 87 名, 2018 年 85 名) である。調査期間は、各年 4 月のキャンプ終了後からアンケート回収日までの 1 週間であった。

2. 調査方法

調査票は毎年実施してきた「健康栄養学科フレッシュマンキャンプアンケート」を使用した。調査票の内容は、2015 年～2018 年の 4 年間については 9 項目の選択式の質問①性別、②キャンプの実施場所の適切さ(「キャンプの場所(地名)は適切でしたか?」)、③宿泊施設の適切さ(「宿泊施設(宿名)は適切でしたか?」)、④宿泊施設の食事のおいしさ、⑤教員の学科ガイダンスの理解度(「教員の学科ガイダンスはよく理解できましたか?」)、⑥2 年生主催のレクリエーションの楽しさ、⑦友人作りとしての意義(「キャンプは友人を作るきっかけとして適切でしたか?」)、⑧キャンプの有意義さ(「全体として今回のキャンプはあなたにとって有意義でしたか?」)、⑨今後の必要性(「今後もこうした内容のキャンプを新入生向けに行った方がよいと思いますか?」)と、2 項目の自由記述の質問⑩「今回のキャンプで良かった点、満足できた点、何か良い感想があれば記入」、⑪「キャンプで変えて欲しい点、不満な点、改善案や提案があれば記入」であった。2019 年のアンケートにはこれらに以下の 4 項目の選択式の質問を追加している。⑩「先輩と語ろう」の良さ(「先輩と語ろう」は良かったですか?)、⑪野外昼食作りの楽しさ(「野外での昼食作りは楽しかったですか?」)、⑫自由時間の適切さ(「自由時間は適切でしたか?」)、⑬入学時の入試区分(AO 入試、指定校推薦入試、公募推薦入試、A 日程・B 日程一般入試、センター入試、特別

入試の 7 つの入試区分)。

回答の選択肢の尺度は、①「とても思う」、②「やや思う」、③「どちらとも言えない」、④「あまり思わない」、⑤「全く思わない」の 5 段階とした。集計の際には最も良い評価の「とても思う」を 5 点、最も悪い評価の「全く思わない」を 1 点とし、各段階を 1 点間隔で点数評価した。

なお、本調査は無記名自記式アンケートで実施したため、個人を特定することはできない。

3. 解析方法・評価方法

統計ソフト SPSS (Ver. 25) を使用した。入手データより一般的な記述統計、分布図等を作成・確認した。Mann-Whitney の U 検定、Spearman の順位相関係数等を用いて結果を評価した ($p < 0.05$)。

4. 倫理的配慮

本研究は、高崎健康福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号: 第 3071 号)。研究対象者に対し、研究の目的、協力内容、無記名自記式であることや個人のプライバシーを保護すること、研究参加は自由意思に基づくこと、同意撤回方法等について文書を用いて説明を行った。また、過去の質問票を使用するにあたり、高崎健康福祉大学倫理委員会の承認を得た後、速やかに大学 HP の「地域・研究活動の研究活動」でオプトアウトを周知した。

IV. 結果と考察

1. アンケートの回収率

アンケートの回収率は、2015～2019 年の 5 年全体で 93.5%であった。多くの学生が回答し、2017 年、2018 年は回収率 100%であった。し

表2 質問項目と各年評価平均点等一覧

質問項目	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	項目ごとの平均点	
						⑪ 2015 ～19 年	⑫ 2015 ～18 年
②キャンプの場所（地名）は適切でしたか	3.9	4.3	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1
③キャンプの宿泊場所（宿名）は適切でしたか	3.9	4.3	4.0	4.2	4.3	4.1	4.1
④宿泊場所（宿名）の食事はおいしかったですか	3.8	4.0	4.0	3.9	3.6	3.9	3.9
⑤学科ガイダンスはよく理解できましたか	4.1	4.3	4.0	4.2	4.3	4.2	4.2
⑥レクリエーションは楽しかったですか	4.5	4.7	4.3	4.5	4.9	4.6	4.5*
⑦キャンプは友人を作るきっかけとして適切でしたか	4.4	4.5	4.4	4.4	4.8	4.5	4.4*
⑧全体として今回のキャンプはあなたにとって有意義でしたか	4.3	4.4	4.3	4.4	4.6	4.4	4.4*
⑨今後もこうしたキャンプを新入生向けに行った方が良いと思いますか	4.5	4.5	4.3	4.4	4.7	4.5	4.4*
⑩各年の全質問の平均点	4.2***	4.4	4.2*	4.3*	4.4		

⑩⑫ 2019 年との差は Mann-Whitney の U 検定による。漸近有意確率(両側) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

かし、性別の記載を忘れる学生がおり、5 年間で 3.7% あった。

2. 単純集計結果からの分析

表 2 は、5 年間共通の、性別を除く②～⑨の 8 つの質問項目と各年の評価の平均点を一覧にしたものである。

まず学生のキャンプの総合的な評価を見るために、②～⑨の全質問の各年の平均点を見てみる（表 2 の⑩の欄）。5 点が最高点であるので、5 年間を通して概ね高い満足度であったと思われる。特に評価の低い年も無かったと言える。

次に、表 2 の⑪の欄には、②～⑨の質問ごとの 5 年間の平均点を示した。平均点の高い項目順に並べると、⑥レクリエーションの楽しさ、⑨今後のキャンプの必要性、⑦友人作りのきつ

かけとなった、⑧キャンプの有意義さ、となっていた。これらに比べると②宿泊場所、③宿泊施設、④施設の食事についてはやや低めの評価になっている。宿泊場所、宿泊施設、施設の食事については学科独自の努力による改善は難しいところである。⑤ガイダンスの理解度もそれに次いで低くてなっていて、この点は改善が求められるところである。その他の学科独自の取り組みに関係する項目は概ね良く評価されていると言える。

2019 年の結果に注目すると、⑩の欄に示したように 5 年間では最も点数が高く、2015 年、2017 年、2018 年の全質問の平均点とは有意差が確認された。また、2019 年の結果は⑥レクリエーション、⑦友人作り、⑧有意義さ、⑨今後の必要性の質問において 5 年間で最も点数が

高く、⑫の欄に示したように、2015年～2018年までの各質問の平均点とは有意差が確認され、学科の取り組みが良く評価されたと考えられる（⑥宿の食事については2019年が最も評価が低かった）。

3. キャンプを「有意義」にするもの

次に質問間の関係を確認した。表3は⑧「キャンプが全体として有意義であった」かどうかの回答と他の質問の回答とがどのような関係にあるのか、5年間全体での相関（順位相関係数）を確認したものである。

表3 ⑧「全体としてキャンプは有意義でしたか」と他の質問との関係

⑨今後も行うべき	⑦友人作り	⑧レクの楽しさ	⑤ガイダンスの理解
0.789**	0.788**	0.576**	0.495**

Spearman の順位相関係数による。
有意確率（両側）** $p < 0.01$

この結果から、学生がキャンプの⑧「有意義さ」を感じることに⑨「今後もキャンプを行うべき」・⑦「友人作りのきっかけ」となったと感じることと高い相関関係があることがわかる。「有意義」と感じたからこそ「今後も行うべき」という判断であろうが、学生たちにとってのキャンプの「有意義さ」には「友人」関係が形成される契機が重要であることがこのことから伺われる。

また参考ではあるが、2019年に限ると⑤「学科ガイダンスの理解度」と⑧「有意義さ」との間には有意な相関が確認できず、これは2018年までの4年間では無かったことであった。2018年までの各年の相関係数は0.50～0.58（ $p < 0.001$ ）が確認できた。これについては、2019年のキャンプの行程が影響した可能性が

ある。2019年は表1の行程の変更を行っており、1日目の「学科ガイダンス①」は午前中に大学で実施し午後から宿泊地へ移動しその後の行事を実施した。相関が認められなかったのはこのことが影響したのではないと思われる。学生たちは「学科ガイダンス①」が大学で実施されたことでキャンプ行事の一環としての認識を弱め、キャンプの「有意義さ」の評価との関連を弱めたのではないかと推測する。だが、このことは必ずしも「学科ガイダンス」の役割が不十分であったということにはならず、2019年の「学科ガイダンス」の評価点は4.3であり（表2の⑤）、2015～18年までの平均点の4.2より高めだからである（表2の⑫、有意差は無い）。加えて、2019年に「学科ガイダンス」を大学で実施したのはキャンプ行程全体のゆとりを作るための意図的な変更であり、その結果として表2の⑩に示したような5年間で最も高い質問全体の平均点が得られた可能性もあると考える。いずれにしろ、2019年の「学科ガイダンス」のように宿泊地と離れて実施される行事については、学生たちにキャンプ全体との関連付けが意識化されるような計画や実行方法を考慮する必要があるだろう。

その他に、2019年のアンケートでは先述のように⑬「入学時の入試区分」の質問を設けていたが、これについては「AO、指定校推薦、公募推薦」入試入学グループ（以降「推薦グループ」、有効回答数31, 44.2%）と「A・B日程一般、センター、特別」入試入学グループ（以降「一般グループ」、有効回答数41, 55.7%）とに分け、キャンプの各行事（質問⑤～⑫）の評価に差異があるかを確認してみた。「推薦グループ」は学科の「入学前教育」により12月と2月に2回顔を合わせ、講義やグループワークを経験して

おり、キャンプ前に一定の人間関係が出来ていると言える。結果として、図1・図2に示すように、⑦「友人作りのきっかけ」と⑫「自由時間の適切さ」の回答において2グループ間に有意差が確認された（Mann-WhitneyのU検定によ

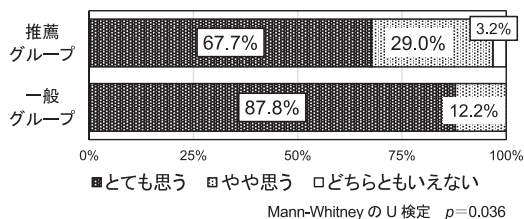


図1 入試区分と⑦「友人づくりのきっかけとなった」との関係

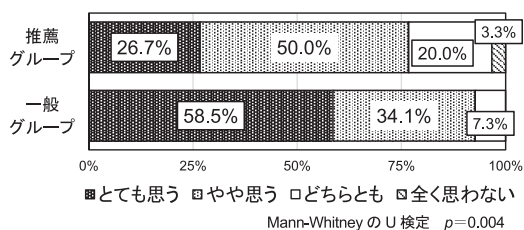


図2 入試区分と⑫「自由時間の適切さ」との関係

る)。

「一般グループ」の方が「友人作りのきっかけ」となったと回答する傾向が高く ($p=0.036$)、「自由時間」は「適切であった」と回答する傾向も高かった ($p=0.004$)。「一般グループ」はキャンプから友人作りが始まるのであり、「自由時間」の回答傾向の理由は明確ではないが、馴染みのない雰囲気の中で「自由時間」を求める気持ちが強かったのかもしれない。なお分析を要するところである。

4. 自由記述の結果から

表4は5年間の自由記述について、良かった点・悪かった点、満足・不満足点で同種の内容で数が多いものを例示したものである。満足できた点としてやはり「他者との関わり」「友だち作り」が挙げられることが多かった。一方、不満足な点は数が限られたが、多かったのは「荒天時の飯盒炊爨」に関するものであった。天候が荒れた年に限定されるが、これに遭遇した時の学生のダメージが大きい。飯盒炊爨は食に関

表4 主な自由記述の例

良かった点、満足点など	2015	2016	2017	2018	2019	計
色々な人と関わることができた	21	12	19	20	10	82
先輩と語ろう（履修方法を含む）でいろいろ聞け安心できた	21	15	27	15	8	86
友だち作りのきっかけになり、友人が増えた	18	4	13	8	9	52
レクリエーションがよかった	16	5	9	11	13	54
先輩が優しくかった	3		5			8

変えてほしい点、不満足点など	2015	2016	2017	2018	2019	計
荒天での飯盒炊爨は辛い・荒天時のレクの準備が必要	7		2		10	19
食事の量が多すぎた・他学科より食事が劣っていた	1	4		4	1	10
翌日が休みになるような日程にして欲しい	2			3	2	7
説明をゆっくり、丁寧にしたい	1	1	1			3

わり、後片付けも含めて共同作業を要するもので、学科としても大事にしたいところではある。しかし、学生の健康面への配慮の必要もあり、臨機応変に代替的な行事に切り替えられる準備が求められる。

V. おわりに

以上5年間のアンケート結果をもとにキャンプの分析を行ってきた。もともと定量的な分析を前提としたアンケート設計では無かったため、知り得たことも限定的なものであった。

今回の分析によって、本学科のフレッシュマンキャンプは全体的には高めの評価が得られていて、大学生活への導入としては一定の意義を果たしてきたと考える。また、学生たちはキャンプの「有意義さ」について「友人作り」の側面に関心を持っていて、この点は今後のキャンプの改善策を考えていく上でも大事な要素として踏まえておく必要はあると思われる。

しかし、今回の分析ではキャンプの満足度や評価はどのような企画や取組みによって向上させられるのかの検討はできておらず、また、キャンプの満足度が向上することがその後の学生たちの大学生活をどのように円滑にし、学修を有効なものにするのかについても検討できていない。これらは今後の課題である。これらの課題の追究にあたっては、学生のキャンプ体験のその後の大学生活への「適応感」等への効果を探索する先行研究²⁻⁵⁾や、キャンプ内容のその後の学生の学修面への効果を探索する先行研究⁶⁾を参考にしていくことが有効であろう。いずれにしろその際には、本学科がこれまでキャンプ

の主な目的を親睦に置いてきたことを見直し、初年次教育の一環として、その後の4年間にわたる教育計画を構想する中でキャンプの役割や目的を再定義し内容の検討を行っていくことが必要であろう。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました方々に深く感謝申し上げます。

著者の利益相反開示

本研究において申告すべき利益相反はない。

参考文献

- 1) 中央教育審議会. 学士課程教育の構築へ向けて(答申). 2008-12, pp.35-37
- 2) 林綾子, 宮本友弘. フレッシュマンキャンプと大学生活適応に関する研究. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要. 2011-03, 8, pp.93-99.
- 3) 林綾子. アカデミックアワー研究報告 初年次教育としてのフレッシュマンキャンプが大学適応に及ぼす影響—Social Provisionに着目して—. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要. 2016, 13, pp.81-84.
- 4) 林綾子, 宮本友弘, 水津真委. 初年次教育としてのキャンプ体験が大学適応感に及ぼす影響についての探索的研究—Social Provisionに着目して—. 野外教育研究. 2018, 21(2), pp.1-13.
- 5) 大久保智生. 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討. 教育心理学研究. 2005-09, 53(3), pp.307-319.
- 6) 渡邊利明, 杉浦加奈子, 鎌塚正志ほか. 医療 Early Exposure Program 導入によるフレッシュマンキャンプの効果—早期臨床モデルを用いた Early Exposure Program は学習モチベーション持続効果と大学適応度能力の向上をもたらす—. 帝京科学大学教育・教職研究. 2018-03, 3(2), pp.39-48.